

# 仮面ライダー+ノブナガの野望

夢野飛羽真

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

あらすじ

これは戦国世界と呼ばれる異世界の話

この世界にはヒノモト地方とナンバン地方の2つの大陸郡だけが存在する惑星があった。

ヒノモト地方には45の国があり、ブシヨウと呼ばれる者達が全ての国の統一を目指して日々戦を繰り返していた。

だがその戦場にいるのは鎧武者だけではない。

仮面を被りバイクで駆ける戦士達、仮面ライダー

武将達は仮面ライダーを戦力として日々鎬を削っていた。

そんな時代の中アイチの国を治める若き武将、織田ノブナガと仮面ライダーバレットの覇道の物語が今始まる。

# 目次

## 主な設定集

登場人物等の設定集

1

仮面ライダー設定

6

物語開始時点での勢力図

9

## 本編

第一話：旅立ち

15

第二話：伊賀忍者大乱

27

## 主な設定集

### 登場人物等の設定集

#### 世界観

街並みや国々の治世は江戸時代や室町時代と同じだが科学技術は通常の世界の現代以上に発達しており、土農工商のどの身分の者でもスマホやパソコン、ゲーム等の電子機器を持っている。

ヒノモト地方には日本列島の本州と同じ形だがかなり広大なホンシユウ大陸、四国と同じ形でオーストラリア程の面積のシコク大陸、アフリカ大陸ぐらゐの大ききで九州と同じ形のキュウシユウ大陸がある。

この3つの大陸上に合わせて45の国があり、数多くのブシヨウ達が覇権を巡って争いを繰り返していた。

#### 用語解説

##### 武家

各国を治める武将の集団

##### 大名

武家を治める当主である武将

##### ランセフォン

この世界の人々が持つスマホ型のデバイスだがスマホ以上の性能があり、どこにでも電波が届き所謂ギガ数なども気にしなくてよい。

##### 召喚アプリ

ランセフォンのアプリの一つ

仮面ライダーを召喚することが可能

一般人はライドプレイヤー、黒影トルーパー、ライオトルーパー等を召喚できる。

有力な武将はそれぞれ固有の仮面ライダーを持ち、召喚、使役ができる。

1人1体までしかライダーの召喚はできない。

また、他人に自分が所持するライダーを譲渡したり、他人の所有す

るライダーを強奪することも可能。

変身アプリ

仮面ライダーバレット専用

アプリから変身用のアイテムを出して所有者を変身させる。

雑賀衆

ワカヤマの国を治める武家であり傭兵集団

金を出した勢力に味方する。

登場人物紹介

伊勢タダヤス（CV梅原裕一郎）

16歳 男性

身長174cm 体重67kg 筋肉質

趣味 料理

特技 銃の扱い、格闘技

性格

冷静に見えて周囲にもクールに振舞っているが実は内心はかなり熱い

新しい考え方を取り入れるタイプで古いルールやしきたりはあまり好まない。

人当たりが良くて誰とでも打ち解けられるが、自分が苦手意識を持つ相手とは距離を置く。

詳細

雑賀衆に所属する若き武士で元服したばかり。

容姿端麗で所謂イケメンの部類に入る見た目

一族総出でワカヤマの国を治める雑賀衆に仕えていた。

銃の名手であった父と同じく銃の扱いが上手く将来有望

だったが、所属する雑賀衆はお金を多く出した相手に味方する方針であり、このことが原因で松永家の襲撃を受けて家族を失う。

この事件が原因で雑賀衆のやり方を疑問視し棟梁の雑賀マゴイチと対立

ワカヤマの国を出奔して旅に出る。その最中に海辺でバレットド

ライダーを拾ったことで人生が大きく変わり始める。

セリフサンプル

「俺は仮面ライダーバレット、死にたい奴からかかって来い！」

「ターゲットロックオン」

「この一撃でお前らを一掃する！」

「さあ、勝鬨の時だ！」

ミツキ（CV瀬戸麻沙美）

15歳 女性

ミエの国にある忍の里に住む見習のくノ一

活発な性格をしている。

旅をしているタダヤスと出会い徐々に彼のことが気になり始める。

織田家内の人物

織田ノブナガ（CV櫻井孝宏）

21歳 男性

アイチの国北部を収める織田家の新当主

父ノブヒデの死後各地の敵から領地を狙われ囲まれている。

だが本人はかなりの自信家でこの窮地を乗り切ると豪語している。

革新的な考え方を持つ一方で周囲の家臣からは変わり者と言われている。

かなりの派手好きだが領民や仲間には優しいという一面もある。

仮面ライダージオウの使い手

ノウヒメ（CV水樹奈々）

18歳 女性

織田家の隣国の斎藤家から嫁いできた姫でノブナガの妻

あまりノブナガに心開いていない様子

仮面ライダーツクヨミの使い手

柴田カツイエ（CV竹本英史）

40歳 男性

織田家家臣

豪傑な武将で鬼柴田と言われている。

以前変わり者のノブナガの実力を疑い謀反を起こそうとしたが失

敗

しかしノブナガに許されて以降は心を入れ替えて忠誠を尽くしている。

仮面ライダーゲイツの使い手

丹羽ナガヒデ（CV三木眞一郎）

40歳 男性

織田家家臣

智謀が優れた武将

ノブナガの側近

仮面ライダーウオズの使い手

滝川カズマス（CV福山潤）

35歳 男性

織田家家臣

忍者との関わりが深い武将で謀略や外交に長けている。

また、戦もかなり上手い

よく隣国のミエの国に出入りしている。

他の武家の武将

雑賀マゴイチ（CV諏訪部順一）

30歳 男性

ワカヤマの国を治める雑賀衆の棟梁

なんでも損得勘定で考えてより多く自分達に金を払う者に味方する。

斎藤ドウサン

故人 男性

元斎藤家の当主

ノウヒメの父でノブナガの義父

斎藤家の当主だったが息子のヨシタツに謀反を起こされて攻め滅ぼされる。

斎藤ヨシタツ（CV宮園拓夢）

25歳 男性

現斎藤家の当主

ドウサンの息子で謀反を起こして当首の座に座る。

今はノブナガのいるアイチの国を狙っている。

仮面ライダーダークゴーストの使い手

今川ヨシモト（CV及村健次）

40歳 男性

今川家当主

広大なシズオカの国を手中に収め次は織田家の領地を狙っている。

仮面ライダーリバイスの使い手

徳川イエヤス（CV内山昂輝）

16歳 男性

今川家に仕える武将

元々は徳川家の跡取りだったが徳川家が今川家に吸収されて現在は家臣として仕えている。

ノブナガとは幼馴染の関係

仮面ライダーセンチュリーの使い手

豊臣ヒデヨシ（CV中村悠一）

25歳 男性

オオサカの国を治める豊臣家の当主

10代の頃から有力な家臣と仮面ライダーを手に元々ヒョウゴの国を収めていた武将達と戦い最近平定した新進気鋭の武将

最近金にものを言わせて雑賀衆を雇い入れているらしい。

仮面ライダーディケイドの使い手



## 仮面ライダー設定

仮面ライダーバレット

ワカヤマの国の海辺にナンバンから漂着した謎のライダーシステム

ナイフや銃などの武器ウエポン、全18種類の属性エレメント、ナンバン地方に君臨した伝説の戦士達ジェネラル

この3つの力が秘められたライドマガジンを使用して変身する。

バレットドライバー（CV駒田航）

直方体型の銃身のような形をしている。

左横にグリップと引き金、上部にマガジンスロットが3つ付いている。

マガジンスロットはそれぞれウエポン、エレメント、ジェネラルのライドマガジンが挿入できる。

また、ランセフオン専用のアプリに変化してダウンロードされる機能がある。

グリップを一回引くと体術必殺が、二回引くと銃撃必殺が発動する。

ランセフオン

ヒノモト地方に暮らす人々全員が持っているスマホ型のデバイス。

サモンズアプリが標準搭載されていて、仮面ライダーの召喚という機能がある。

また、変身アプリをダウンロードし、ドライバーやマガジンを収納、召喚することができる。

ライドマガジン

ハンドガンのマガジンを模したアイテム

ウエポンマガジン

武器のデータが入っている。

仮面ライダーバレットの使用武器になる。

種類

ナイフ、ハンドガン、アサルトライフル、ショットガン、グレネー

ドラランチャー、マグナム、ロケットランチャー  
エレメントマガジン

18種類の属性のデータが入っている。

仮面ライダーバレットにその属性を付与する。

種類

ノーマル、ファイアー、アクア、グラス、エレキ、アイス、ファイター、ポイズン、グラント、ウインド、エスパ、インセクト、ロツク、ゴースト、イービル、スチール、フェアリー、ドラゴン

ジエネラルマガジン

ナンバン地方に君臨した伝説の戦士達ジエネラルのデータが秘められている。

ジエネラルマガジンはフォームチェンジの基本を成しており、ジエネラルマガジンが変わることで装備や装甲などの形態が変わる。

また、各ジエネラルと相性の良いエレメントマガジンが装填されていると相乗効果で強化される。

ジエネラルの種類（初期所持分のみ）

トリックスター

バレットの基本形態となるマガジン

ナンバン地方で革命を起こしたジエネラル

素早い動きで敵を翻弄する。

相性の良いエレメント↓ファイアー、アクア、グラス

ナイト

ナンバン地方の騎士のジエネラル

西洋甲冑の様な装甲とアーティクルソードという剣型武器を装備する。

防御力とアーティクルソードによる攻撃力が非常に高い。

相性の良いエレメント↓ファイター、ロツク、スチール

アンデッド

ナンバン地方の不死身の吸血鬼のジエネラル

吸血コウモリを多数召喚して使役する。

相性の良いエレメント↓ゴースト、インセクト

## 変身プロセス

ランセフォンの変身アプリを起動し画面を自身の腰に向けると、アプリから転送されたバレットドライバーが変身者の腰に装着される。

『(ウエポン名)！(エレメント名)！(ジエネラル名！)』

バレットドライバーにウエポンマガジン、エレメントマガジン、ジエネラルマガジンを挿入する。

「変身！」

『Change The KAMEN RIDER！(フォーム名)！』

ドライバーのグリップに付いている引き金を引いて変身する。

フォーム名は”エレメント名+ジエネラル名”という命名になる。

体術必殺

ファイナルアタック

バレットドライバーのグロックを一回引くと発動する。

エレメントマガジンとジエネラルマガジンのエネルギーを最大限引き出して身体に纏わせてパンチやキックなどの技を放つ。

銃撃必殺

ファイナルショット

バレットドライバーのグリップを二回引くと発動する。

エレメントマガジンとジエネラルマガジンに加えてウエポンマガジンのエネルギーも開放

ウエポンにエネルギーを集中して一気に敵を撃ち抜く。

## 物語開始時点での勢力図

### 勢力図

東北エリア

南部家

領地：アオモリの国、アキタの国、イワテの国

主な武将：南部ハルマサ、南部ノブナオ、津軽タメノブ

仮面ライダー：キバ、イクサ、サガ、ダークキバ、レイ、アーク

最上家

領地：ヤマガタの国

主な武将：最上ヨシアキ

仮面ライダー：武人鎧武、シルフィー

伊達家

領地：ミヤギの国、フクシマの国

主な武将：伊達マサムネ、片倉コジユウロウ、伊達シゲザネ、鬼庭

ツナモト

仮面ライダー：ダブル、アクセル、エターナル、スカル

関東エリア

佐竹家

領地：イバラキの国

主な武将：佐竹ヨシシゲ、佐竹ヨシノブ、小田ウジハル

仮面ライダー：響鬼、威吹鬼、轟鬼、斬鬼、裁鬼、弾鬼、鋭鬼、朱

鬼

宇都宮家

領地：トチギの国

主な武将：宇都宮トラツナ

仮面ライダー：歌舞鬼、凍鬼、羽撃鬼、西鬼、煌鬼

里見家

領地：チバの国南部

主な武将：里見ヨシザネ、フシヒメ、8犬士

仮面ライダー：セイバー、ブレイズ、エスパーダ、最光、カリバー、

サーベラ、デユランダル、ソロモン

### 北条家

領地：カナガワの国、トウキョウの国、サイタマの国、グンマの国、チバの国北部

主な武将：北条ウジヤス、北条ツナシゲ、北条ウジマサ、北条ウジテル、北条ウジクニ

仮面ライダー：エグゼイド、ブレイブ、スナイプ、レーザー、ゲンム、パラドクス、ポッピー、クロノス

### 北陸エリア

### 上杉家

領地：ニイガタの国、トヤマの国

主な武将：上杉ケンシン、上杉カゲカツ、直江カネツグ、柿崎カゲイエ、甘粕カゲモチ

仮面ライダー：電王、ゼロノス、ガオウ、ネガ電王、NEW電王、幽汽、G電王

### 前田家

領地：イシカワの国

主な武将：前田トシイエ、マツ

仮面ライダー：フォーゼ、メテオ、なでしこ

### 朝倉家

領地：フクイの国

主な武将：朝倉ヨシカゲ、朝倉ソウテキ、山崎カタイエ

仮面ライダー：イドウン、タイラント、セイヴァー、ブラックバロン

### 中部地方

### 武田家

領地：ヤマナシの国、ナガノの国

主な武将：武田シンゲン、真田ユキムラ、武田四天王

仮面ライダー：ブレイド、ギャレン、カリス、レンゲル、グレイブ、ランス、ラルク

### 今川家

領地：シズオカの国、アイチの国東部

主な武将：今川ヨシモト、太原セツサイ、徳川イエヤス、徳川四天王

仮面ライダー：リバイス、ライブ（エビル）、ジャンヌ、デモンズ、センチユリー（イエヤス専用）

仮面ライダー（徳川家）：マルス、冠

織田家

領地：アイチの国西部、

主な武将：織田ノブナガ、森ランマル、ノウヒメ、織田四天王

仮面ライダー：ジオウ、ゲイツ、ウオズ、ツクヨミ

斎藤家

領地：ギフの国

主な武将：斎藤ヨシタツ、日根野ヒロナリ、美濃三人衆

仮面ライダー：ダークゴースト、ゼロスペクター、ダークネクロム

（レッド、ブルー、イエロー）

関西エリア

浅井家

領地：シガの国

主な武将：浅井ナガマサ、イチ、磯野カズマサ

仮面ライダー：クイズ、キカイ、ギンガ

伊賀忍者

領地：ミエの国

主な武将：服部ハンゾウ、百地サンダユウ、藤林マサヤス、石川ゴ

エモン

仮面ライダー：シノビ、ハツタリ、剣斬、ファルシオン

松永家

領地：ナラの国

主な武将：松永ヒサヒデ

仮面ライダー：ファイフティーン、リュウガ、ファム、ベルデ

雑賀衆

領地：ワカヤマの国

主な武将：雑賀マゴイチ

仮面ライダー：ファイズ、カイザ、デルタ、サイガ、オーガ

豊臣家

領地：ヒョウゴの国

主な武将：豊臣ヒデヨシ、ネネ、黒田カンベエ、竹中ハンベエ、石田ミツナリ、加藤キヨマサ、福島マサノリ

仮面ライダー：デイケイド、デイエンド、キバーラ、クウガ、アビス、天鬼、スラッシュ、バスター

足利家

領地：キョウトの国

主な武将：足利ヨシテル、細川フジタカ、三淵フジヒデ、幕府奉公衆

仮面ライダー：鎧武、バロン、龍玄、斬月、グリドン、黒影、ブラーボ、ナツクル、シグルド、デューク、マリカ

中国エリア

宇喜多家

領地：オカヤマの国

主な武将：宇喜多ナオイエ、宇喜多ヒデイエ

仮面ライダー：ウイザード、ビースト、メイジ、白い魔法使い  
毛利家

領地：ヒロシマの国

主な武将：毛利モトナリ、毛利タカモト、吉川モトハル、小早川タカカゲ、毛利テルモト

仮面ライダー：カブト、ガタック、ザビー、ドレイク、サソード、キックホッパー、パンチホッパー、ダークカブト

大内家

領地：ヤマグチの国

主な武将：大内ヨシタカ、陶ハルカタ

仮面ライダー：アギト、G3/G3-X、ギルス、アナザーアギト

尼子家

領地：トツトリの国、シマネの国

主な武将：尼子ハルヒサ、山中シカノスケ、尼子十勇士

仮面ライダー：ドライブ、マツハ、チェイサー、ハート、ブレン、ルパン、ダークドライブ

四国エリア

三好家

領地：カガワの国、トクシマの国、大阪の国（関西エリア）

主な武将：三好ナガヨシ、三好ヨシカタ、安宅フユヤス、十河カズマサ

仮面ライダー：龍騎、ナイト、ゾルダ、王蛇、シザース、ライア、ガイ、タイガ、インペラー、オーデイン

長宗我部家

領地：エヒメの国、コウチの国

主な武将：長宗我部モトチカ、香宗我部チカヤス、長宗我部ノブチカ、長宗我部モリチカ

仮面ライダー：オーズ、バース、プロトバース、アクア、ポセイドン

九州エリア

龍造寺家

領地：サガの国、ナガサキの国

主な武将：龍造寺隆信、鍋島ナオシゲ、龍造寺

仮面ライダー：ゴースト、スペクター、ネクロム大友家

領地：フクオカの国、オオイタの国、クマモトの国北部

主な武将：大友ソウリン、立花ドウセツ、高橋ジヨウウン、立花ムネシゲ、立花ギンチヨ

仮面ライダー：ゼロワン、バルカン、バルキリー、迅、滅、雷、亡、サウザー、アークゼロ

島津家

領地：カゴシマの国、ミヤザキの国、クマモトの国南部



主な武将：島津ヨシヒサ、島津ヨシヒロ、島津トシヒサ、島津イエ  
ヒサ、新納タダモト、島津タダツネ  
仮面ライダー：ビルド、クローズ、グリス、ローグ、エボル、マッ  
ドローグ

## 本編

### 第一話：旅立ち

(3人称視点)

此処はセンゴク世界

世は乱世の時代

ホンシユウ大陸、シコク大陸、キユウシユウ大陸の3つの大陸が集うヒノモト地方の統一を目指し数多くの勢力がしのぎを削っていた。

「かかれー！」

ここはナガノの国北部にある川中島の地

幾つかの川に囲まれた自然豊かな盆地である川中島だが今は兵共の戦いの場と化している。

ヤマナシの国とナガノの国を治める武田軍とニイガタの国を治める上杉軍が戦を繰り広げている。

各軍の先頭で戦う者達はマツボツクリを模した鎧を付けた黒影トルーパー

お互いが自身の得物である長槍、影松を交え、時々上から振り下ろして敵の脳天に叩き付けている。

「鉄砲隊放て!!」

さらに各軍の武将が指令を出すとライドプレイヤー達が隊列を組み己の武器のライドウエポンを銃型にして敵の軍に向けて撃っている。

「騎兵隊！突撃!!」

辺りに響き渡る法螺貝の音と共にバイクのエンジン音が鳴り響き、それと共に武田軍、上杉軍双方から現れたライオトルーパーが専用のオートバイ”ジャイロアタッカー”を駆り、次々と敵の黒影トルーパーやライドプレイヤーに向けて突撃していく。

「退け！退け！」

「一度退け！」

バイクに退かれたトルーパー達や、逆に反撃を受けてバイクから転

落したライオトルーパー達は体力の限界を迎えて消滅していく。

武田軍と上杉軍、双方の兵達が後退を告げる太鼓の音と共に距離を取り始める。

「さてさて、そろそろワシの出番かのう……」

後退する武田の兵とライダー達の間割り入って上杉方の兵達に向けて歩みを進める一人の男がいた。

「シ、シンゲン様!」

その男の名は武田シンゲン、筋骨隆々な肉体の壮年の武将だ。

赤い鎧に鬼の様な角と白毛を蓄えた兜の派手さは敵の上杉方に”

この男が敵軍の大將で2カ国を治める武田家の当主である。”という事をわからせるには十分だった。

「ここはワシに任せよ、この場で決着を付けよう!」

上杉軍の兵達に向けて勢い良く声を上げたシンゲンは己の懐からランセフォンを取り出す。

戦に明け暮れるこの世界でも科学技術という物は発達していた。

城や服装、世界の風景は所謂戦国時代の物ではあるがこの世界には高層ビル、パーソナルコンピュータ、電子レンジ、テレビ、コンピュータゲーム等、科学技術の産物が多く存在し所謂スマホ型のデバイスであるランセフォンもその一つだ。

「出でよ!仮面ライダーブレイド!」

このランセフォンは戦に於いて1つの大きな役割を担っている。

それは召喚アプリによる仮面ライダーの召喚

先程戦いを繰り広げていたライオトルーパー、黒影トルーパー、ライドプレイヤー達も各軍の兵士が自分のランセフォンから召喚した存在である。

『サモンライダー!ブレイド!』

そして武田軍総大將のシンゲンは自らのランセフォンで武田の主力である仮面ライダーブレイドを召喚する。

「さて、敵兵を蹴散らせ!」

シンゲンの命令で上杉の兵達を切らんと走り出したブレイドだったが、突如上杉兵の上を飛び越えるようにして現れた仮面ライダー電

王・ソードフォームが上からデンガツシャーをブレイド目掛けて振り下ろしてブレイドの進撃を止める。

「現れたか、武田シンゲン」

「久しぶりじゃのう、上杉ケンシン」

仮面ライダー電王と共に現れた白馬に乗り、白い甲冑で身を固めた  
武将

彼の名は上杉ケンシン、上杉軍の総大将である。

「のう、ケンシン、大将同士の戦いといこうじゃないか！」

「望むところだ！」

シンゲンのブレイドとケンシンの電王が互いに向かって走り出して剣を振るい交え合う。

それと同時に各軍のライダー達も再び敵に向けて突撃を始める。

この世界での武力は仮面ライダー

武将達は仮面ライダーと共に戦争を勝ち抜き、ヒノモト地方の統一を目指していた。

そんな戦乱の中ある若武者の伝説が始まろうとしていた。

(タダヤス視点)

「タダヤス殿！タダヤス殿！」

俺の名前は伊勢タダヤス、現在私の目に映る綺麗な海が自慢のワカヤマの国出身の若武者だ。

後ろから俺の名前を連呼している男臭い人は土橋モリシゲ殿、ワカヤマの国を治める雑賀衆に仕える武士なんだけど慌てた様子で俺のことを呼び止めようとしている。

「如何なさいました？土橋殿」

「如何したでは無いじゃろう！出奔するとはどういうことじゃ!!」

このお方の目的は恐らく雑賀衆を離れてこの国から出ていこうとしている俺を止めること。

しかし俺の決意は固い。俺は何を言われてもこのワカヤマの国から離れるつもりだ。

「そのままの意味でございませす。雑賀衆からは離反させていただきます。」

「やはり、先日の方が原因か？」

「まあ、そういうことですね。」

俺の所属していた雑賀衆は国を治めつつ、自分達に多く金を払う傭兵活動をしている。

悪く言えば金次第でコロコロと味方を変えるってやり方をしてる連中だ。

「気持ちはわからぬでもない、これまで懇意に接してきた三好方の勢力を裏切りヒョウゴの豊臣に与したことをワシも不可解じゃと思っておる。」

我らのいるワカヤマの国が存在するこの関西エリアは長い間2つの勢力による争いが巻き起こっていた。

1つ目の勢力はキョウトの国の足利家、嘗てヒノモト地方を治めていたという將軍足利一族の勢力だが今は一国を治める大名に成り下がっている。

2つ目の勢力は三好家、オオサカと四国エリアの半分を治める武家でナラの国を治める松永家と徒党を組んで足利家及び彼らに味方する勢力と戦を繰り広げていた。

俺が属していた雑賀衆は最初の内は足利家に味方して戦をしていたが、途中で三好家側に寝返った。

そしてこの前、三好家から離反しヒョウゴの国の勢力の豊臣家に味方することを表明した。

「豊臣に与した理由は大体察しは付いている。金だろ？」

この様なことになったのも原因は雑賀衆のやり方だ。

棟梁の雑賀マゴイチとその先祖共は基本的に金に目がない、雑賀衆に多く金を払う者に付いて行く所謂傭兵的な立ち位置で活動している。

「そうではあるが、今に始まったことじゃないだろ！」

「確かに、俺の一族もこれまでそのやり方に従ってきたが……」

「その家族が死んだんじゃ従うこともできないってことか？」

モリシゲ殿の言う通りだ。

雑賀衆が三好家から離反したことが原因で三好方の松永ヒサヒデ

は俺達のいる集落を襲撃してきた。

俺の家族はその襲撃で全員死んでしまった……

だから俺は…雑賀衆のやり方には付いていけないッ……!!

「そうだ、もう話すことは無い。」

「じゃがタダヤス殿の様な銃の名手がいなくなつては……」

モリシゲ殿が俺の説得を続けようとしたその時だった。

突如爆発音が鳴り響いた。

「何の音じゃ!?!」

「海の方かッ……!!」

音が鳴つた海の方を見るとナンバン地方の貿易船が炎を上げながら座礁していた。

恐らくオオサカの港に向かつていた船だろう。

ナンバン地方からはたまに未知の技術が伝来することがあり、この貿易船も恐らくそういったものを運んでいたのだろうか……?!

「モリシゲ殿! 船の乗員が困っているかもしれない。助けに参るぞ!」

「た、タダヤス殿!」

俺は船の乗員が心配になり、近くの浜まで無我夢中で走って向かった。

砂浜に付くとすぐにこの地域の漁船や商用船が助けに向かつている様子と砂浜に散らばっている船からの漂着物が目に入る。その中でも一際異彩と輝きを放つ金色の箱一つと多くの金貨が散らばっていることからかなりの金銀財宝が船に積まれていてそれが流れ着いたのだろうかと推察できる。

「モリシゲ殿は雑賀衆の者を呼んで下さい。これらの物を回収し、後で船員の方々に届けてもらわねばいけませんので。」

「あいわかった、タダヤス殿は如何する?」

「俺は雑賀の者が来るまでここを見張る。」

「承知した。では御免!」

ここに漂着物はどれも高価な物であると考えられる。

強奪されればナンバンの方々からすれば大きな損害となるだろう。

これらを保護して後で雑賀衆から返却すれば何らかの益はあるだ

ろう。

俺が雑賀衆から離れる詫びにはなるだろう。

モリシゲ殿を使いとして向かわせて俺は荷物の中から拳銃を取り出して見張りに付く。

「貿易船が沈んだって聞いて来て見りややつぱ色々漂着してるじゃねえか！」

「高そうなモンいっぱいあるぜ！」

「早速強奪じゃ！」

やつぱり来たな。山賊共が…

「おい兄ちゃん、そこどいてもらおうか。」

「それはできぬ。」

「そうかい、だったらとつとと死んでもらおうか！」

山賊の数は6人。

そいつらはすぐに砂浜を包囲してランセフォンを取り出す。

「来い！仮面ライダー！」

『サモンライダー！ライオトルーパー！』

『サモンライダー！黒影トルーパー！』

『サモンライダー！ライドプレイヤー！』

そしてライオトルーパーを2体、黒影トルーパーを2体、ライドプレイヤーを2体召喚する。

俺も対抗するためにランセフォンを取り出して仮面ライダーを召喚しようとしたその時だった。

『変身アプリを確認しました。』

「どういうことだ？」

俺のランセフォンが音と光を発したかと思えば、漂着物の1つである金色の箱が光の塊になって周囲を飛び回り、召喚された山賊のライダー達を蹴散らす。

「何が起きてやがるんだ!？」

「立て！お前ら！」

困惑する山賊達だがライダー達を再び立ち上がらせて攻撃を仕掛けようとするが、少し立ち上がるのに時間がかかっているようだ。

『変身アプリをダウンロード』

だがその時、光の塊が発光する俺のランセフォンの中に入り込む。

『バレットドライバーを転送』

そのランセフォンの画面に変身アプリと書かれた画面が表示されたかと思えば、どこからか現れた仮面ライダーのベルトが俺の腰に装着される。

「まさか俺自身が仮面ライダーに変身しなければいけないのか？」

変身アプリと言っているだけあって恐らくこれは自分で仮面ライダーに変身して戦えと言うことだろう。

まったく、またナンバンは未知の技術を持ってきたのか。

だが今は6人の山賊と彼らが召喚した仮面ライダーに囲まれている状況だ。

なりふり構っている暇はないな。俺は戦う！

『ライドマガジンを転送』

ランセフォンから3本の銃のマガジンの様な物が転送され、それを一本ずつベルトの上部に差し込んでいく。

『ハンドガン！ノーマル！トリックスター！』

「変身！」

そしてベルト左横のグリップに付いているトリガーを引く。

『Change The KAMEN RIDER！ノーマルトリックスター！』

（3人称視点）

バレットドライバーとウェポンマガジン、エレメントマガジン、ジェネラルマガジンの3つのライドマガジンを使うことで伊勢タダヤスは仮面ライダーバレットへと変身を遂げる。

オレンジ色と白の装甲、緑色の複眼、所々にある黄色と青の星の意匠、そして機動性のあるスマートなフォームは正に場をかき乱す奇術師と星を連想させる。

そして彼は自身の右腰のホルスターに収納されたハンドガン取り出す。

「さあ、死にたい奴からかかって来い！」



ハンドガンを手を取ったバレットに一齐に襲い掛かる山賊側の仮面ライダー達。

その先頭にいる2体の黒影トルーパーがバレットの頭部目掛けて槍を突くが、バレットは反射神経でその突きをしゃがんで避け、姿勢を低くしたままハンドガンで2体の黒影トルーパーの腹部を連続で撃つ。

(撃ちやすいな……)

バレットの頭部バイザーには資格補助機能があり、装備した銃の照準が表示され、放たれた銃弾が何処に到達するかがわかる。

元々銃の腕前があるタダヤスはより正確に敵を撃ち抜くことができる。

(速射性も良い感じだ)

さらにライドマガジンの力によって装備されている銃は反動等を最低限にまで抑え、弾のリロードの必要もない。その為か普通の銃よりも弾を撃つペースが早く、黒影トルーパーに続くようにバレットに襲い掛かるライオトルーパーらを一体撃つては別の敵を撃つということをスムーズにやってのけている。

「な、なんだよコイツ!」

「テメエらも撃つちまえ!」

銃弾を受けて怯むライドプレイヤーとライオトルーパーに山賊達が銃を撃つように指示すると各々の銃がバレットに向けられて一齐に放たれる。

「後ろが甘いようだな」

仮面ライダーバレット・ノーマルトリックスターはトリックスターのジエネラルマガジンを使った形態である。トリックスターの力は機動力とスピードに優れており飛び交う弾丸を避けながら加速し、一瞬で山賊が召喚したライダー達の背後に回るとバレットのハンドガンが敵の背中に向けて火を噴く。

「さて、まずはお前からからだ!」

『シングル!』

バレットドライバーの左横にあるグリップを一回引くと体中を無

属性の白いエネルギーが流れてバレットの両足に集中する。

『体術必殺！』

銃弾を受けて怯んでいる2体のライオトルーパーに向けてバレットが走り出し。

『ファイナルアタック！』

右足で一体目のライオトルーパーにエネルギーを纏った回し蹴りを放ち、足を振り切った後に地に足を付けそのまま軸足にして踏ん張り、もう一体のライオトルーパーに向けて左足で回し蹴りをする。

「俺のライダーが！」

エネルギーを込めた蹴りを撃ち込まれた2体のライオトルーパーは体力の限界を迎えて消滅する。

「次はお前達だ。」

さらに残った4体のライダーの懐に潜り込むように足元に潜り込み、ハンドガンでそれぞれの腹部と胸部を次々に撃ち抜く。

「ハッ！」

各敵に何発も銃弾を撃ち、さらにライドプレイヤーの頭部をバレットが左手で殴り飛ばす。

「トウツ……！」

さらに別のライオトルーパーにも飛び蹴りをし、反動で突き飛ばされたライオトルーパーの身体が黒影らにぶつかる。

「ここで決める！」

『シングル！ダブル！』

『銃撃必殺！』

ノーマルのエレメントのエネルギーがバレットの身体からハンドガンに流れてきて銃口の前に弾丸状のエネルギーの塊が生成され、

「ターゲットロックオン」

『ファイナルショット！』

「この一撃で、お前らを一掃する！」

ライオトルーパーと黒影トルーパー2体に向けてハンドガンからエネルギー弾を解き放つ。

「さて、後はお前らだけだ。」

3体のライダーはこの一撃で撃破されて消滅、残ったライドプレイヤーと山賊達にバレットが銃口を向ける。

「ク、クソツ……」

「逃げる！逃げるぞ!!」

山賊達はこの状況は不利だと判断し退散する。

「タダヤス殿!?タダヤス殿か!?!」

「モリシゲ殿か。」

山賊達と入れ替わるように雑賀衆の者を呼びに行っていた土橋モリシゲが戻ってきた。

「その姿は……?」

「それが……山賊達が襲い掛かってきた為対処しようとしたら漂着物のうち1つがランセフオンかに吸収されていつの間にか変身を……」

「漂着物つてもしやツ……!?!」

モリシゲは辺りを見回しながらあることに気付いてしまった。

「あの金色の箱かツ!!」

「え、ええ……その通りですが……」

「その箱は戻せそうか?」

「わかりません、けどやってみましょう。」

とタダヤスはベルトからマガジンを抜き取り変身を解除するがアイテムは全て光の粒子となり自身のランセフオンに吸い込まれていく。

「こ、これは……」

アイテムは全てランセフオン内にある変身アプリの中にデータ化して収納されており、何度か2人が弄っては見たがもともとの金色の箱に戻すことはできそうになかった。

「戻せそうにないな……」

「仕方がない、それは今はお前が持つておけ!」

モリシゲは漂流物のうち1つが仮面ライダーの力になり、タダヤスの手に渡っただけでなく元の状態に戻せないならタダヤスに所持してもらおうしかないと判断したが1つ問題があった。

「し、しかし……これでは俺が漂流物を盗んだと思われるのでは?」

「そこが問題じゃが致し方ない！そなたは逃げろ！」

それはタダヤスがベルトを盗んだと言われてしまうこと。

と言うより実際不可抗力とはいえ盗んだのとほぼ同じ状況であるのでナンバンの者や雑賀衆の者に何を言われるかがわからなかった。

「に、逃げろと言われましても……」

「良いから逃げろ！元から国を離れる予定じゃったのだろ？あの箱のことは見なかったこととする！ワカヤマの港より早く逃げよ！」

「すまぬ、モリシゲ殿。かたじけない！」

モリシゲは若き友人タダヤスを庇うことにし、彼に深く頭を下げてタダヤスは去っていく。

この後雑賀衆らによってモリシゲがどのような目に遭わされるかはわからない。雑賀衆にとって大きな利益を失ってしまったため、かなりの恨みを買ってしまふ。

タダヤスやモリシゲの立場はこの国の中では危うい、モリシゲは箱が無かったと説明するため国に残り、そしてタダヤスは国を出て新たな旅路を歩み始める。

そう、戦乱の中の旅路を……

そしてまた、もう一人の男が戦乱の中で自分の道を歩み始めていた。

「伊賀忍者が攻めてきたか、だが俺の覇道はそれ如きでは終わらない。」

アイチの国とミエの国の国境にて2つの軍が対峙していた。

ミエの国側に布陣しているのは忍者たちも多くいる伊賀忍者衆の軍、そしてアイチの国側に布陣しているのはアイチの国の領主である織田軍

「カツイエー！ナガヒデ！向かうぞ！」

「ハッ！」

織田軍総大将である織田ノブナガは家臣たちに命令を出し、伊賀の軍に攻撃を仕掛ける。

『サモンライダー！ジオウ！』

『サモンライダー！ゲイツ！』

『サモンライダー！ウオズ！』

織田軍側の3人の仮面ライダーが召喚されて伊賀忍者の軍に向かって突撃を始める。

「さあ行け、わが軍よ！天下泰平のため、まずは自分の国を守るのだ！」

織田の軍がどんどん伊賀忍者の軍を押ししていく。

この織田軍を率いる武将、織田ノブナガはのちに天下布武を掲げてヒノモト地方統一に乗り出す。

だがそれはもう少し後の話となるだろう……

To be continued

## 第二話：伊賀忍者大乱

(タダヤス視点)

フェリーでの旅は中々落ち着くものだ。

初めての船旅ではあるが半個室のベットの所でランセフォンを見て色々考えるのも悪くない。

モリシゲ殿を置いてきてしまったという状況と謎のライダーシステムが自分のランセフォンに入ってきてしまったという事象で混乱している頭を整理するには丁度いい。

「うむ、これの機能は大体わかった。」

変身アプリの分析によって俺がこの前変身した仮面ライダーバレットの能力がよく分かった。

ウエポンマガジン、エレメントマガジン、ジェネラルマガジンの3つのライドマガジンを使うライダーってことがよく分かった。武器、属性、そして戦士の組み合わせを利用して戦うことができる。

今は持っているライドマガジンの種類を学び、今後の戦いでも組み合わせさせて使えるように頭に知識を叩きこんでいるところだ。

『間もなく桑名の港に到着いたします。降りる方はご準備をお願いいたします。』

さて、バレットドライバーを手にした後モリシゲ殿にワカヤマの国から逃げるように言われた俺は港からミエの国に行くフェリーに乗って移動することになった。

ミエの国は忍者の国とも言われていて様々な流派の忍者がいるらしい。

「一先ず降りるか。」

特にどこに行くという目標もなく飛び乗った船がこれだったので俺は一旦ミエの国で降りてここに滞在することにした。

(いい雰囲気だな。)

船が港に到着し、そこには栄えた港町の風景が広がっていた。

(宿にも困らなさそうだな。さて、しばらく滞在するには丁度良さそうだ。)

と希望を胸にこの地に降り立ったがその希望はすぐに打ち砕かれた。

「テメエ見ねえ顔だな。ちよつとついて来い。」

「い、いきなりなんですか!？」

港について宿を探していたところ怪しげな黒装束の男たちに取り囲まれてしまった。

まあ、彼らからすれば他国から来た俺の方が怪しいのかも知れないが…

まあ兎に角、自分がただの旅人だと説明して誤解を解くか、追剥の場合はバレットに変身して戦うかのどちらの展開になるかは分からないが一旦は彼らに付いて行って話し合うしかないだろうな。

「大人しくついて来い!」

「致し方無いな。」

俺は彼らに連れられて港町から付近の屋敷に移動する。

「単刀直入に言おう。そなた、織田家の者だな?」

「織田家? 何の話だ。」

屋敷に着くなりすぐに忍者のうち一人に問い詰められたがどうやら俺は織田家から来たかと誤解されているようだ。

織田家と言うとミエの国の隣国のアイチの国の勢力のはずだ。

何故俺がその織田家の者と疑われているんだ?

「しらばつくれるな!」

「俺は本当に関係ない。俺はワカヤマの国から来た。」

「嘘をつくな!」

何故こいつらは俺のことをここまで疑っているんだ?

「嘘ではない! 俺は元々雑賀衆の人間だ!」

「だったら証拠を出せ!」

証拠を出せと言われれば仕方がない。

ランセフォンで身分照会を…

いや、待てよ。そんなことをすればバレットの存在がバレてしまう。

もし仮にだが彼らが雑賀衆やナンバンの追手だったら?

「このまま捕らえられてしまう……」

「なんだ？何かやましい事でもあるのか？」

「い、いや、そういう訳では……」

『サモンライダー！ハッターリ！』

その時だった、誰かがライダーを召喚したかと思えば俺を取り囲んでいた忍者集団の身体が一気に凍り付く。

「な、なんだ…!?!」

「ようようよう、百地一派の皆さんよお！織田に喧嘩売ったと思ったら今度は観光客を拉致かい？卑屈なことばつかしやがるねえ!!」

屋敷の襖を蹴破って現れたのは派手でまるで歌舞伎の登場人物のような恰好をした男と恐らく先聞こえてきたランセフォンの音声から察するに仮面ライダーハッターリという橙色の仮面ライダーだろう。

「出たな！石川ゴエモン！かかれ！かかれ！」

他の忍者たちが現れてゴエモンと呼ばれるこの派手な男を襲おうとするが。

「させないよー！」

何本ものクナイや手裏剣が飛んできて俺を囲む忍者達のランセフォンを撃ち落とす。

「さあ、こつちこつち」

「かたじけない」

恐らくこのクナイ等を投げたと思われる赤髪のくノ一の少女が俺の下に来て避難誘導をしてくれる。

「一先ず俺は助けてくれた忍者の方々と共にこの場から逃走する。」

「煙は撒いておいたぜ。ここまでは追って来れねえだろ。」

暫く北の森の方向に逃げて、石川ゴエモン殿らと合流して一先ず立ち止まる。

「さて、お兄さん。なぜこんな時期にこの国に来たんだい？」

と、助けてくれたくノ一が俺に問いかけてきた。

「少し自分の国で色々あってな、だがまさか旅人に突っかかるほどの情勢だとは思っていなかった。」

モリシゲ殿と別れた時の俺は旅の荷物等は持っていたが特に計画



もなかったからな、飛び乗った船の行き先が戦争中というのを考えられていなかった。

「ふーん、訳アリか。名前はなんていうんだ？」

「俺はタダヤス、伊勢タダヤスだ。」

「私はミツキ、とりあえずここは危険だし、早く逃げるんだな。」

「とは言っても元々俺は旅人だからな。この国に長居する理由はない。」

くノ一のミツキ達の言う通り俺はこの国から逃げるつもりだが何故忍者同士で戦っていたのだろうか…

「つつても、暫くは俺達と暫く一緒にいてもらった方が安全だろ。」

とゴエモン殿が口を開く。

「どうせ俺らも里を抜けるんだ。この国から出るまでは一緒にいてもらった方が良いだろ。」

「確かにその方が安全かもね、タダヤス殿はどうする？」

「俺は構わんが、その前に聞きたいことがある。」

ゴエモン殿からはミエの国からの離脱まで共に行動しようとする案をされ、俺はその提案を受け入れることにした。

だがいくつかわからないことがある。他国と戦争しているのは知っているが忍者同士で争いが起きている様にも見えてしまう。

ゴエモン殿の里を抜けるという発言から彼らが伊賀忍であることが分かる。

また、先程俺を捕まえた忍者達は俺を織田家の者と疑っていた。

つまり織田家と敵対する伊賀忍者の者であると推測できる。

だから、この2組が対立している理由がよく分からない。

「今のこの国と伊賀忍者の現状を教えてください。」

「ええ、良いわ。私が話すわね。」

ミツキ殿が今の現状を放してくれるようだ。

「ミエの国では今2つの忍者の派閥に分かれているの。」

「2つの派閥？」

「そう、1つは私達の派閥。服部ハンゾウ様の派閥よ。」

服部ハンゾウという男は聞いたことがある。

ミエの国を治める伊賀忍者の棟梁である男だ。

恐らく今俺と一緒にいるミツキ殿やゴエモン殿を含めた忍の集団は彼の部下なのだろう。

「もう1つの派閥は百地サンダユウの派閥よ。織田軍に戦争を仕掛けたのは彼らね。」

「つまり、派閥の内1つが勝手に戦を仕掛けたということか？」  
「そういうことね。」

その後のミツキ殿らの話を聞いたところ、ミエの国内での内乱で百地派が勝利を収めたことで国が彼らに乗っ取られてミツキ殿ら服部派は国を追いやられることになってしまったそうだ。

服部ハンゾウは既に他国へ追放されているようだが……

「話は分かった。それで君達もミエの国からの脱出を目指しているということか。」

「そうね、一先ず先を急ぎましょう。こちら辺は百地派の者も多いから。」

「了解した。」

俺もミツキ殿らもミエの国に今いるのは危険だ。

俺は彼らと共に脱出することにしたが、全く、ワカヤマの次はミエから逃げることになるのか……

(3人称視点)

タダヤスとミツキ、ゴエモンに加えて服部派の忍3名は1夜の間川を一つ越えて長島という土地に辿り着いた。

橋や船でもう1つ川を越えれば隣国のアイチの国に辿り着くことができる。

「この辺は百地派の奴が多い、気を付けろよ。」

「了解」

ゴエモンら忍たちは一般人が来ているような着物に着替えてタダヤスの様な旅人のフリをして長島の土地をゆっくりと進んでいた。

「あの城は……？」

その一行の真ん中を歩いているタダヤスが自分達の南側にある1つの城についてミツキに問いかける。

「あれは長島城、この前の織田への侵攻でも軍事拠点に使われてた城ね。ここは百地派の巢窟だから早めに抜けましょう。」

長島の地はアイチの国との国境付近と言うこともあり、長島城を始めとした軍事施設などがあり、軍備もかなり整えられている地域だ。即ち百地派の者が多く出入りしており、彼ら服部派の者の首を狙っている者も多くいる。

「そういう訳にはいきませんよ、服部派の下郎共！」

「アンタは!?!」

突如として百地派の忍十数名が現れてゴエモン一行を取り囲んだ。

「藤林、テメエ……」

ゴエモンが自分を取り囲む忍のうち一人、白髪長身の男藤林マサヤスを睨みつける。

「これはこれはゴエモン殿、あなたの盗んだ仮面ライダーハツタリを返していただきますよ!」

『サモンライダー! 黒影トルーパー!』

『サモンライダー! 剣斬!』

服部派と百地派の争いの最中、石川ゴエモンはミエの国が所有する仮面ライダーの1人であるハツタリを他の武将から奪い、自らの物としていた。

それ故百地派からすればゴエモンからハツタリを奪い返すことも1つの重要な任務であり、百地派の重臣である藤林マサヤスは部下達と共にゴエモンを襲撃

自らの仮面ライダーである剣斬を召喚し、部下が召喚した黒影トルーパーと共にゴエモンの一行に襲い掛かる。

『サモンライダー! 黒影トルーパー!』

『サモンライダー! ハツタリ!』

ゴエモンらもハツタリと黒影トルーパーを召喚して応戦するが多勢に無勢

藤林マサヤスはすぐに自分が勝利できると考えていたが……

「ミツキ殿! ゴエモン殿! 俺に任せろ!」

『変身アプリア起動』

彼にとつて一番の誤算は伊勢タダヤス、仮面ライダーバレットの存在だろう。

『ショットガン！ファイアー！トリックスター！』

「変身！」

『Change The KAMEN RIDER！ファイアートリックスター！』

囲まれたタダヤスはすぐさまバレットに変身した。

以前ワカヤマの国で変身した際の姿とは違い、体には赤いラインが入っており、手にはショットガンを持っている。

「タダヤス殿！」

「下がっていよ！」

バレットはゴエモン達よりも前に出て百地派の黒影トルーパー達をショットガンで次々と撃つていく。

その弾丸はファイアーエレメントの力によって炎を纏っており、弾丸を喰らった黒影トルーパー達は身体に弾丸が当たると共に熱と燃焼によるダメージを受け、中には体が発火する者もいる。

「な、なんなんだコイツ……」

「た、タダヤス殿!?こんなに強かったのかッ……」

トリックスターの特徴である俊敏性と機動力でバレットは一瞬にして、もともとの進行方向であるアイチの国側の道を阻んでいる黒影トルーパー達の背後に回り、彼らの背中を撃ち抜く。

「今のうちに走れ！」

バレットが開けた退路に向けてゴエモンらが走っていく。

「追え！追うのだ！」

「させるか!!」

藤林マサヤスが率いるライダー達がそれを追おうとするがその前にバレットが立ちはだかり、黒影トルーパーらにショットガンの弾丸を放つ。

『アサルトライフル！』

バレットドライバーのウエポンマガジンをアサルトライフルのウエポンマガジンに入れ替えるとショットガンがアサルトライフル

に変わり、弾を連射する。

炎を纏った弾丸の雨が黒影トルーパー達と藤林マサヤスの剣斬に降り注ぐ。

(さて、俺もアイチの国の方へ向かわないとな…)

アサルトライフルの連射で百地派のライダー達と距離を取りつつ後退していく。

「そう上手くはいかせない！その力、俺の物にしてやろう！ゆけ！剣斬！」

ライダー達の先頭にいた剣斬がアサルトライフルの弾丸を右に左に避けながらバレットに接近、切りかかろうとするがバレットも銃を撃ちながら後退

「剣で俺と戦うのはやめておけ。お前の件が届く前に俺が撃ち抜くからな…」

自分に接近してくる剣斬の剣の軌道や体の動きを読み取りつつ回避し、足元などに弾丸を放ってけん制

「どんどん剣斬や黒影トルーパーらとの距離を置いていくが…」

「数が多い…」

藤林マサヤスは既に援軍を呼んでおり、部下の黒影トルーパー達が続々とやってきていた。

アサルトライフルの連射だけでは捌き切れないほどの数が集まっております、徐々に敵とバレットの距離が詰められていく。

「だったら、コイツを使ってみるか…」

敵に迫られているバレットは新たなジェネラルマガジンをランセフォンから転送し、バレットドライバーに装填する。

『アサルトライフル！ファイアー！アンデッド！』

『Change The KAMEN RIDER！ファイアーアンデッド！』

バレットの姿が闇に包まれる。

そしてその闇を切り裂き、吸血鬼と人狼を組み合わせた姿の鎧を纏った戦士が姿を現す。

ナンバン地方の不死身の吸血鬼のジェネラル、アンデッドの力を身

体に纏っている。

その名も仮面ライダーバレット・ファイアーアンデッド、ファイアーのエLEMENTマガジンの力で炎の属性のエネルギーを身に纏っていることを表わすように、体には赤いラインが入っている。

「さあ来い！吸血コウモリ！」

アンデッドの固有能力は大量のコウモリを召喚するというものである。

それもエレメントマガジンの属性を纏うことができるという特性を持った者を大量に召喚して使役できる。

「敵を襲えー！」

バレットが召喚した炎を纏うコウモリの大群が一斉に剣斬と黒影トルーパー達に襲い掛かる。

「な、なんだこれは!？」

藤林ら忍者達がライダー達と共にバレットを追っていたが、コウモリたちが襲い掛かり、攪乱される。

黒影トルーパー達の中にはコウモリに噛まれたり、突撃されたりしてダメージから消滅してしまう者も現れる。

「想像以上の力だな。」

召喚されるコウモリの数はかなり多く、追手全員を攪乱するには十分だった。

その間にバレットはミツキ達の下へ急ぐ。

「こっちにも来たー！」

「ハッター！頼んだー！」

アイチの国に向かって進んでいるミツキとゴエモン達にも百地派の黒影トルーパーが迫り、それをハッターが撃破しているが…

「数が追い付かねえー！」

だが次々と押し寄せてくる黒影トルーパーの大群の前にハッターは捌き切れずに追い詰められていく。

「結構来てるな…！」

だが、その黒影トルーパー達もバレットが召喚したコウモリたちに次々と襲われていく。

「ミツキ殿、ゴエモン殿、このまま逃げ切るぞ。」

「タダヤス殿…うむ、アイチの国まで突っ走るぞ！」

バレットと合流したゴエモン一行は召喚されたコウモリ達を使って敵兵を阻みながら突き進んでいく。

『こぶた3兄弟！双刀分断！壺の手、手裏剣！忒の手、二刀流！風双剣翠風！』

だがそのコウモリ達を掻き分けて忍者ぶた3形態に変身し、3体に分身した剣斬が現れてバレットに切りかかる。

「分身した!?!」

分身したうちの一体は二刀流、他の二体は一刀流と手裏剣モードにした風双剣翠風をそれぞれ手に持ちバレットに向けて切りかかる。

「流石忍者、恐ろしい戦法だ。」

三種類の刃を躲しつつ、足元を狙ってアサルトライフルで撃つて牽制

「さて、アンデッドの本領発揮だ。」

『ゴースト！』

『ゴーストアンデッド！』

そしてベルトのエレメントマガジンをファイアーマガジンからゴーストマガジンに入れ替え、霊力のエネルギーを身体に纏う。

「これで俺は、死をも凌駕する！」

アサルトライフルから放たれる銃弾は靈魂のような青白い炎を纏い、幽霊のように自由自在に動く。

その軌道はまるで意思を持つように、銃弾を弾くために振るわれる風双剣翠風を掻い潜って避けて3体の剣斬の胸部で炸裂する。

「これが相性の良い組み合わせか。」

各ジエネラルにはそれ自身と相性の良いエレメントマガジンがある。

例えばアンデッドと相性が良いのはこのゴースト

霊的な力を最大限引き出し、そして特殊な能力を発動する。

それが、この霊のように動き回る銃弾である。

「良い力だ。」

自由自在に動く弾丸を次々と剣斬や黒影トルーパーに放って、次々とダメージを与えていく。

「さあ、トドメだ！」

バレットがベルト左横のグリップにあるトリガーを二回引く。

『シングル！ダブル！』

「ターゲットロックオン」

『銃撃必殺！』

身体中の霊力がアサルトライフルに注ぎこまれる。

『ファイナルショット！』

「この一撃で、お前を止める！」

そして霊力がこもった弾丸が秒間何十発も放たれる。

その銃弾達は幽霊のように縦横無尽に飛び回り、3体の剣斬に襲い掛かる。

一刀流の剣斬が風双剣翠風を横薙ぎに振るい、銃撃を防ごうとするが、銃弾はその一閃を躲し、剣斬の胸に突き刺さる。

手裏剣状にした風双剣翠風を投げる剣斬、だが銃弾達はその軌道を避け、雨の様に剣斬の身体に降り注ぐ。

二刀流にした風双剣翠風を振るい、自身に近付いてくる弾丸を弾いていく剣斬。

だがその足元を集中的に弾丸が襲い、避けようと宙に飛んだ剣斬を多数の弾丸が一輝に襲う。

「勝鬨の時だ。」

分身した3体の剣斬は同時に体力の限界を迎えて爆散、消滅する。

「ば、馬鹿な!?!私の剣斬が!!」

「さあ、大将首は取ったぞ。兵を退くなら今だ。」

剣斬を倒されて動揺する藤林マサヤスにバレットは銃を向けて兵を退くように要求する。

「そうは行くか！既に長島城より1000の兵がこちらに向かっていく！」

(1000人か…まずいな……)

長島城より押し寄せる1000人の兵という言葉にバレットは動



揺を隠せない。

流石にその数を捌き切ることはできない。

「ほう、もうそろそろ着くだらうな。」

兵が迫ってきていることを象徴するように、バイクのエンジン音や自動車の駆動音が周囲に響き渡る。

「マサヤス様！あれは我が軍ではありません！」

だが1人の忍者がそれは伊賀忍者の兵の物では無いということをもサヤスに告げる。

「じゃあどこの軍だと言うのだ？」

「織田軍です！織田の兵2000が船を使って長島に上陸し、こちらに向かっております!!」

忍者の言葉が本当のことであると裏付ける様に、東の方面より紫色の旗を掲げた集団が迫っていた。

彼らの先頭を軍用の車両が走行しており、後ろからバイクに乗った者達が続いている。

「な、何故織田軍がここにおるのだ!!」

迎撃の姿勢を見せた百地派の忍達だったが、彼らの前で織田軍は進撃を辞め、前の車からこの軍を率いている織田家の当主、織田ノブナガが姿を現す。

「決まってるだろう、長島の地でこれほどの軍が動いていた故また攻めてくるのかと思ひ先に倒しに来ただけだ。」

ノブナガの言葉と共に兵達が自分のランセフォンを構え、今にも自分の仮面ライダーを召喚しようとしていた。

「そ、その様なつもりではなかったのです!!」

マサヤスら忍者達にとってこの状況は非常にまずかった。

自分達は1000人いるのに対して相手は2000人の兵を引き連れている。

つまり、2000体のライダーを召喚してこられてしまい、そんなれば現有の戦力で対処しきれないだろう。

それに彼の仮面ライダーである剣斬はバレットにやられてしまい、体力を回復させないとまた召喚はできない。さらに、バレットらが織

田に味方すればより不利だ。

人数の差でもライダーの差でも不利なマサヤスは下手に出て織田軍に撤退してもらおう道しか残されていなかった。

「では、この兵はどういうことかな？」

「こ、この罪人達を捕まえるために出陣させただけです！決して」

「見苦しい言い訳だな。たった6人の罪人を相手にこれ程の数は必要か？」

圧倒的に不利な状況、そしてノブナガの威圧的な雰囲気と正論の前に言い訳も通用せずただただマサヤスは冷静さを失い、必死に訴え始める。

「そ、それ程の実力があつたのだ！私のライダーも！多くの黒影トルーパー達も！すべてあの男に倒されてしまったんです！！本当です！！」

「そこまで言うのであれば賭けをしようか…」

「か、賭けですか…？」

「この6人の身柄はわが織田軍で預かろう。そこで奴らを見定める。もし、彼らが無能な者なら貴様の嘘が偽りであると判断しミエの国に攻め入ろう。だが、彼らがこの兵の数に値する有能な者達なら貴様の言葉を真としてミエの国との戦は自重しよう。」

バレットとゴエモン一行らが優秀な戦士かどうかをマサヤスの言葉の判断基準にする。

それがノブナガの申し出た賭けだった。

それに乗るとなればゴエモンに盗まれた仮面ライダーハツタリを奪い返すことができなくなるかもしれないが、このまま攻め込まれてしまうのも不味い状況である。

「賭けに…乗ります…」

マサヤスはノブナガの話に乗る道を選んだ。

既に1度大敗を喫した相手と再び戦うというリスクを負うのはミエの国と伊賀忍者衆にとって不利益と判断したからであった。

「ほう、その者らもそれでいいか？」

「俺は構わん。」

タダヤスは変身を解除してノブナガの問いかけに応える。

「自ら仮面ライダーに変身して戦っていたのか。中々面白い奴だな。」  
ノブナガは仮面ライダーを召喚せず自分で変身して戦っていた異質な存在であるタダヤスを興味深そうな視線で見つめている。

「ありがたきお言葉です。ゴエモン殿らも一旦アイチの国へ行くということで良いか?」

「ああ、構わねえぜ!」

「私も付いて行くわ。」

「なら決まりだ。俺について来い。」

そして、ゴエモンらの一行は織田軍と合流し、アイチの国に向けて進んでいく。

その背中を百地派の者達はただ見ているしかなかった。

(あの強力な仮面ライダーを織田方に渡してしまった…)

マサヤスは一人予感をしていた。

自分達の軍と1人で渡り合った男と新進気鋭の織田ノブナガ彼らが組むことで織田軍がより強力になり、勢力図が大きく塗り替えられてしまうということを……

To be continued